

君に永遠の愛を

——大好きな人が、どんな時も傍にいと約束してくれた時、侑依はこれ以上ないほどの幸せを感じた。

1

その日は、忙しい彼との久しぶりのデートだった。

他愛もない話をしながらレストランで食事をしていると、不意に真面目な顔になった彼が言った。『楽しい時間を過ごす人は、これから先も出てくるだろう。でも、辛い時、苦しい時に傍にいて欲しい人は、君しかいない。ずっと傍にいて、毎日顔が見たい。だから、僕と結婚してくれないか』

じつとこちらを窺い返事を待っている彼に、侑依は思わず問い返してしまう。

『じゃあ、私と同じように辛くて、苦しい時も、必ず傍にいてくれる？』

『どんな時も、ずっと傍にいます。約束する』

そう言って侑依の手を強く握り、微笑む彼。その手の温もりを、もの凄く優しく感じた。

彼の言葉が本当に嬉しくて、胸がいっぱいになる。自然と涙が溢れてきた。

まさか平凡な自分が、彼みたいに素敵の人からこんなことを言ってもらえる日が来るなんて、思ってもいなかった。

それなのに、すぐに返事をしないどころか、咄嗟に問い返してしまった自分のなんと可愛くないことか。でも彼は、そんな侑依にずっと傍にいと約束してくれただけだ。

大好きな彼にそこまで言ってもらって、結婚を断るなどあり得なかった。

『私も約束する。私の方こそ、結婚してください』

抱きついて、ひとつに溶け合うみたいなキスをする。

彼の温かい身体に包まれて、侑依はこれ以上なくらしいの幸福を味わった。

\* \* \*

とても懐かしい夢を見た。あれは一年ほど前、侑依が二十六歳、彼が三十一歳の時のことだ。

プロポーズをされた時に戻ったような幸せな気分を目を覚ます。ひとつ息を吐き出して目を開けた侑依は、見慣れない白い天井に首を傾げた。

天井はどこも大白いよな、と寝起きの頭でぼんやり考える。

そこで、やけに身体が温かいことに気が付いた。不思議に思っ隣を見ると、なぜ温かいのかよくわかった。

自分の腰に巻き付いている男の腕――

たちまち昨夜の失敗を思い出し、侑依は片手で顔を覆った。

いったい何をやっているんだ。

その時、ベッドサイドでアラームが鳴りだす。すぐに布団の中から長い腕が伸びてきて、目覚ましのアラームを止めた。

腕の持ち主は、はあ、と大きく息を吐き、数回瞬きをして目を開ける。

何度見ても、彼の目は綺麗な形をしていると思う。

キリッとした二重目蓋の大きな目は、一度見たら忘れられないほど印象的だ。それに、ずっと通った鼻筋と、薄すぎないちよよい厚さの唇。

彼のように、どこから見ても整った顔立ちをした男は、芸能人以外で見たことがない。

「おはよう侑依」

「……………」

返事をせずにいると、彼は侑依の頬を引っ張った。

「おはようって言ったんだけど、聞こえなかった？」

すぐに頬を引っ張るのをやめた彼を、じっと見つめる。というか、睨んだ。

「おはよう、冬季さん。……また、セックスに持ち込んだ……」

冬季は侑依の視線に怯むことなく、淡々と答える。

「人聞きの悪い。君だって気持ちよさそうにしていた」

そう言いながら、彼は侑依の腰に絡めていた腕を外して起き上がった。ベッドから下りた彼が身に着けているのは、下着一枚だけ。当然、引き締まった背中やヒップライン、そして長い足が露わになっている。

何度も見ているのに毎回ドキドキしてしまう。そんな自分に呆れつつ、侑依も起き上がった。

「シャワーを浴びた方がいい。昨日した後すぐに眠ったから。足の間とかは軽く拭いておいたけど」

「……起こしてよ。そうしたら昨日のうちに帰れたのに」

唇をキュッと引き締めて言う侑依に、彼は小さくため息をついた。

「疲れてるんだろ？ 軽めのセックスで落ちるんだから。寝かせてやりたいという僕の気持ちを無下にするな」

「それでも、起こして欲しかった」

「ホットタオルで拭いても、目を覚まさなかったのに？」

その台詞に、グッと言葉に詰まってしまう。

彼の言う通り、敏感な部分を拭かれても起きなかったのは、それだけ侑依が深く眠っていたからだ。

確かに最近ちょっと忙しかったけど、まさかたった一回のセックスで寝落ちするとは思わない。

「いろいろな気遣ってくれたことには感謝するけど、私は帰って然るべきだったと思う」

それでも反論を試みる侑依に、彼は無表情で答えた。

「終電もない時間にどうやって？ タクシー代だってバカにならないだろう？ ここからだ深夜料金込みで、五千円以上かかるんじゃないか？」

再度グッと言葉に詰まってしまう、思わず下唇を噛んだ。

侑依も働いているから、それなりに収入はあるけれど、あくまでそれなりだ。正直、家賃だけでも結構大変だったりする。冬季は侑依の財布事情を知っているし、侑依も彼と自分の収入に雲泥の差があることをよく知っていた。

それでも、譲れない理由が侑依にはある。

「……だって私たち、もう離婚してるんだよ。こういうことが続くのは、やっぱり良くないと思う。近所の人の目もあるし……」

「僕は気にしない」

そう言って、彼は寝室のクローゼットを開きアンダーシャツを身に着ける。スラックス、シャツと身に着けていくのを眺めながら、侑依はため息をついた。

離婚後、もう何度こうして彼の家に泊まっているだろう。

忘れ物に気付いては彼と会い、そのまま熱い夜を過ごすこともある。

これではいけないと彼からの連絡を無視した挙句、職場の近くまで迎えに来られて、彼の家に連

れて行かれたこともあった。

信用第一の仕事をしていながら、そんなことでいいのかと心配になってしまふ。

元夫である彼——西塔冬季は、比嘉法律事務所という個人事務所に所属している弁護士だ。三十二歳という若さで、すでにデキる弁護士として名が通っているらしい。

四ヶ月ほど前に彼と離婚した侑依は、現在この家を出て一人暮らしをしている。

引越す時、家賃の高い駅近物件を避けるのと同時に、できるだけ彼の住んでいるマンションから離れた場所を選んだのだが、まさかそれがタクシー代という形で裏目に出るとは思わなかった。ネクタイを首にかけた冬季が、クローゼットから布製のバッグを取り出し、ベッドの上の侑依に渡してきた。その布製バッグは、とある飲食店のオリジナルブランド。金色のロゴが入っている。侑依がサブバッグとしてよく使っているものだ。実は色違いでもう一つ持っている。

「これ、この前君が置いていった下着と服。ここから出社するなら着替えた方がいいだろう」  
侑依は少しだけ唇を尖らせた。

彼は侑依の言葉にきちんと返事をしてくれる。けれど、その言葉はつつけんどんだったり、ストレートすぎて傷付くことも多い。これは、結婚して気付いたことだ。

もっと違う言い方があるだろう、と思うこともしばしば。

けれど彼が、まっすぐな性格で、優しく面倒見のいい人情の厚い人だということも、侑依はよく知っていた。

「……ありがとう」

バッグを受け取り、ベッドサイドに立つ彼を見上げる。

「どういたしまして。そのバッグに、今日の服と昨日洗濯した下着を入れていけば、この家に君の忘れ物はもうない」

その言葉になぜかちくりと胸が痛む。侑依はそれに気付かないふりをして、彼に言った。

「じゃあ、私がここに来る理由はないね？」

「理由？」

「そうでしょ……だって私たち、離婚したんだから。いい加減、こういうのはやめようよ」

「こういうのって？」

彼は軽く首を傾げて侑依に問いかけてきた。

私に、それを言わせるの？　と思わず眉を寄せる。

しかし、黙って答えを待っている冬季に観念して、侑依は目線だけ逸らして口を開いた。

「セックス……する理由がないよ」

「離婚したらセックスしないという誓約はしていないし、会わないという約束もしていない。それに僕は、君が離婚して欲しいと言った時、嫌だと断ったはずだ。けれど、君が何度も泣いて懇願するから、仕方なく応じたんだよ」

彼は侑依に言い聞かせるように、じっと見つめてくる。

「今更、離婚について異議申し立てをするつもりはない。でも君は、理由なんかなくても、離婚に応じたあげた僕に会うくらいしてもいいんじゃないか？」

「……さすが弁護士さん。よく口が回る」

じくじくと痛みだす胸に、侑依はキュツと唇を噛む。

離婚して欲しいと言ったのは侑依の方だ。しかも、何度もどうして、と聞いてくる彼に、決して離婚の理由を答えなかった。

ただ「好きだけど離婚して欲しい、ごめんさい」と、何回も繰り返した。

彼は普段からあまり表情を変えない人だったけれど、あの頃は酷く憔悴していたと思う。

最後には、泣いている侑依を見ながらペンを取り、離婚届にサインをしてくれた。

それを思うと、確かに侑依は弱い立場だ。

離婚はしなないと言い続けていた彼に、無理やりこちらのわがままを通したのだから。

改めて自分が彼にしてみましたことを痛感し、侑依はきつく目を閉じる。

すると、はあーっと、大きなため息をついた冬季が、ベッドの上に乗上げてきた。

咄嗟に反応の遅れた侑依は、彼に肩を掴まれもう一方の手で顎を捕らえられる。

「なに？ ……っん！」

彼に唇を奪われ、強く抱きしめられた。最初は触れるだけだった口づけは、すぐに深さを増し、

侑依の口腔内を冬季の舌が攻めてくる。

絡み合った舌に応えたいけれど、ぐっと我慢した。この人との相性はとてもイイ。だからいつも、翻弄されて、気持ちよくされるばかり。

彼の背に回しそうになった手を下ろし、きつくシーツを掴んだ。

昨夜の熱が残っているのか、キスだけで身体が蕩けてくるのがわかる。

キスの合間に唇の隙間から息を吸うけれど、すぐに塞がれてあつという間に呼吸が苦しくなった。

どくどくと心臓の音がうるさい。

苦しげに眉を寄せ、胸を喘がせる侑依に気付いたのか、冬季はゆっくりと唇を離し絡み合った舌を解いた。

「ん……っ」

侑依が小さく声を漏らすと、彼の手が頬を撫でる。

「好きなんだ侑依。君だって、まだ僕のが好きだろう？」

そうして優しく髪の毛を梳き、間近から見つめてくる。

侑依は何も答えなかった。いや、答えることができなかった。どんなに彼の言う通りでも、それを言葉にすることはできない。

侑依は大きく胸を膨らませて乱れた息を整えた。

「私たちは、もう離婚してるんだよ。……だから、他に誰かいい人がいたら、その人と付き合って、

結婚して欲しいの」

最後はちょっとだけ声が震えてしまった。

おずおずと彼を見上げると、フツと笑われて少しだけ頬を引っ張られる。

「泣きそうな顔と声で言われてもまるで説得力がないな。君は意地っ張りだから困る」

ベッドから下りた彼は、軽く服を整える。布団を引き寄せる侑依に向かつて、彼は口を開いた。

「君を愛してるから結婚したし、離婚にも応じた。君がまだ僕と同じ気持ちだとわかっているから、セックスを仕掛けるし、誘う」

それに、と言いながら、冬季は首にかかったネクタイを結び始める。彼の動作は全てが洗練されておち、その整った容姿もプラスされて、つい見入ってしまう。

初めて会った時も、彼にポーッと見惚れてしまったのを思い出す。なんて素敵でカッコイイ男子なんだ、と侑依は胸をときめかせていた。

「もう一度言うけど、君は気持ちよさそうだったし、セックスを嫌がらなかった。つまり同意の上のセックスだったということ。この前も、その前も、ずっと同じだった」

「でも……」

彼は侑依の言葉を遮るように、言葉を続けた。

「君こそ誰かいい人がいたら付き合えばいい。なのに、そうせずに僕との関係が続いている。それは、気心の知れたセフレと気持ちのいいセックスをするため？ それとも、仕事のフラストレーションを発散するため？ もしくは、単に性欲を満たすため？」

「そ、そんなこと！ 違うよ」

あまりの言いように眉を寄せると、彼は涼やかな笑みを浮かべた。

「そうだね。君は決して口にしなないだろうけど、僕が好きだから抱かれています。僕だってこんな関係をズルズルと続けるのは嫌いだ。でも、意地っ張りな君と過ごすには、こうするしかない。僕は君に執着しすぎているか？ 迷惑？」

ネクタイを結び終えた彼は、軽く髪を手櫛で整える。それだけで整う髪質を、侑依はうらやましく思っていたし、それを彼に伝えていた。

『もう、朝の習慣だな』

朝起きたら一番に冬季の髪に触れる侑依に、いつもそう言って彼が笑っていたのを思い出す。

離婚後、侑依は冬季にそれをしなくなつた。彼は侑依が髪に触れる前に、大抵ベッドを下りてしまっているから。

離婚したのだから当たり前だろう、と言われている気がした。

「パンとご飯、どっちがいい？」

「え？」

ぼんやりしていて、反応が遅れる。

「朝食、食べるだろう？」

彼はさっきの質問などなかったみたいに、朝食について聞いてきた。

侑依の答えを聞きたくないからなのか、彼らしい切り替えの早さなのかわからないけれど。  
「……ご飯」

ボソツと答えると、いつの間にかきちんと身支度を整えた冬季が頷く。

「わかった。シャワーしている間に準備しておく」

背を向けて寢室を出て行く彼を見送って、侑依はベッドの上で深いため息をついた。

「冬季さん……まだ好きに決まってるよ……でも、そんなこと言えないでしょ」

自分のせいでダメにした関係。

大好きだからこそ、侑依には耐えられないことがあった。

でも今は、なんであんなに悩んで苦しんでいたんだろうと思うことばかり。

「後悔先に立たず……って私のためにあるような言葉だな……」

彼の言う通り、侑依は変に意地っ張りなところがあって、今もその意地を張っている最中だ。

自分の言葉に責任を持たなければならない。

やってしまったことにも責任を持たなければならない。

毎日そう、言い聞かせている。

侑依は、冬季の人生を掻き回してしまった。

「迷惑なんてこと、ないよ」

執着しすぎている……なんて、とんでもない。

侑依だって、心の中では大好きな彼に抱かれて喜んでいる。口では誰かいい人がいたら、なんて言いながら、そんな人、一生出てこないで欲しいと思っているのだ。

「何してんだろう、私。……本当にバカだ」

はあ、と肩を落として頭を抱える。

けれど、ベッドサイドの時計を見ると、急がなければならない時間だった。

侑依は足元に置いてあるガウンを手に取りながら、これを用意してくれた冬季の優しさを思う。

なんで私は、大切な人の手を離してしまっただろう——

離婚してから何度も繰り返し返してきた問いを胸に、侑依はベッドを下りた。

\* \* \*

テレビを見ながら他愛のない会話をし、一緒に朝食を取った。

結婚当初、食事中ほとんど話さない冬季に戸惑ったものだけれど、慣れれば凄く楽だった。

彼の前では無理に話をする必要がなく、ただゆっくりとした空気が流れる。

そうした時間を、心地よく感じていた。

食事の後片付けをして一緒に家を出る。結局侑依は、冬季に会社の前まで送ってもらった。

シートベルトを外しながら、本当に何をやっているんだろうと思う。これでは夫婦だった時と何



も変わらないじゃないか。

「ありがとう。冬季さんも忙しいのに、会社まで送ってくれて」

ドアに手をかけつつ、運転席の冬季に礼を言う。

「出勤の時は、意地を張らずに素直に送らせてくれるから助かる。次に君を送るのはいつかな？」

冬季は微笑んで侑依を見た。侑依が口を尖らせると、さらにその笑みが深まる。

「もう忘れ物ないし。次はないよ、きつと」

「きつと、か？」

「そう、きつと」

キリッとした顔で言うと、冬季は腕を伸ばして侑依の頭を撫でた。

「また連絡する」

そう言って、冬季は侑依の顔を引き寄せ素早くキスをする。

ここは侑依の会社の前だ。目を丸くする侑依に、彼は薄く笑みを浮かべて、視線を背後にずらした。

「坂峰が見てる。早く行った方がいいな」

ハツとして車の窓に目を向ける。そこに、侑依の働く町工場、坂峰製作所の社長の息子——坂峰

優大がいた。侑依は慌てて助手席のドアを開けて車を降りる。

「じゃあ、冬季さん」

ドアを閉めた後、すぐに冬季は車を発進させた。

それを目で見送った侑依は、立ち止まっている優大に駆け寄る。腕組みをしていた彼は、大きなため息をついた。

「お前さ、元旦那とまたよろしくやってしまったわけ？」

片眉を上げて、あからさまに呆れた顔をされる。彼の言葉に、侑依は気まずくなって顔を逸らした。

ダメだとわかっているのに、冬季を前にすると断れない。今朝、後悔したばかりなのに、優大に言われてさらに後悔の念が募った。侑依は額に手を当て、目を瞑る。

出勤する社員が挨拶しながら、立ち話をする侑依と優大の横を通り過ぎていく。始業までにはまだ時間があるから大丈夫なのだが。

「責めてるわけじゃない。お互いフリーなら、アリだと思っただけ俺は。ただな……だったらお前、なんで西塔と離婚したわけ？　それが俺にはさっぱりわからん」

優大が、肩を竦めて首を左右に振る。

「離婚しても、結局離婚前と変わらないなら、いっそ復縁してもいいんじゃないか？」

「……復縁、はない」

目を開けた侑依は、優大を見て言った。

「意地を張ってもいいことないぞ」

そんなことはわかっている。けれど、何も言わずに離婚してくれた優しい彼を、これ以上振り回したくない。

「これ以上は、冬季さんに迷惑だから」

「好きすぎて別れて？ でも、元旦那はお前のことがまだ好きで？ 今も関係続けて？ すでに迷惑かけっぱなしだと思っけどな」

確かにそうだ、と再びギョッと目を瞑る。自分の言葉が矛盾していることに、なんとも言えない気持ちになった。

「西塔は、お前が離婚を突き付けた理由、知らないんだろ？」

侑依は力なく頷いた。

「冬季さんの周りには、いつだって、凄くキレイで洗練された女性がたくさんいる。あの人は、常にそういう素敵女子たちからアプローチされてるのよ……。彼と結婚するのに、そんなことにも耐えられなかったなんてバカみたいな理由……………言えるわけがないじゃない……………」

我ながら、本当にバカな理由だと思っけ。それでも、あの頃の侑依にとつては、どうしようもないくらいに切実な問題だったのだ。

はあ、とため息をつく優大は、また首を振って侑依に言っけ。

「本当バツカだよな、お前。そんなことを気に病んで、悩みすぎて別れるなんて……。あいつ、今でも本気でお前のこと好きなのにな」

冬季が今も侑依を思っけてくっけているのを知っけている。侑依だっけ、気持ちとは同じ。

でもあの時、つくづく思っけ知らされっけしまったのだ。

『西塔さんはどうして、あなたみたいな人を奥さんにしたのかしら』

ある企業が主催するパーティーに彼と出席した時に言われた言葉――

冬季が法務を担当している大企業が主催で、招待客も富裕層が多かっけたのを覚えてる。

それ以前にも、何度か女性にそう言われたことはあっけたけれど、その日はなぜか、酷く胸に刺さっけたのだ。

ちようど、いろいろな不安が高まっけていた時期だっけたのも関係しているかもしれない。

彼の仕事や、彼を取り巻く世界に触れるたびに、じわじわと不安が膨れ上がっけていく。

ごく平凡な家庭に育っけた侑依には、場違いな気がしてしようがない世界だっけた。けれど、冬季は堂々とその場に馴染んでるし、洗練された可愛らしいお嬢様や、綺麗な女社長たちと絶えず話をしてっけた。

そして、そうした女性たちは、いつだっけ侑依と冬季を見比べ眉をひそめるのだ。

もちろん、それまでも冬季のモチ具合は見てきたけれど、なんだか急に自分の感情をコントロールできなくなっけてしまっけた。

侑依は本当に彼の隣にいてっけいいのか、わからなくなっけてしまっけたのだ。

引き金になっけたのは女性からの言葉だっけたけれど、全ては侑依の弱さが招いた結果である。

「お前が復縁はないって、本気で思ってるなら、今こんなことになってないだろ。……あまり意地を張ると、不幸になるだけだぞ」

敵しいながらも、どこか侑依を気遣っている声こゝね。

優大は最近結婚した。奥さんは、少しふくよかな可愛い子。笑った顔がとても素敵で、見ていると凄く癒いやされる。時々差し入れを持ってきてくれるのだが、手作りのお菓子や料理が本当に美味おいしいのだ。

優大は結婚して幸せだからこそ、余計に侑依のことが心配なのかもしれない。年の近い彼とは同僚だけど、仲の良い友人でもあった。

だから、バカだと言って呆れながらも、こうして気にかけてくれるのだろう。

「わかってる。ありがと、優大」

侑依の言葉に再び大きなため息をつきつつ、彼は「行くぞ」と、侑依の肩を押した。

気持ち切り替え、今日もきちんと仕事をしなければと思う。けれど、侑依の頭からは、なかなか冬季の顔が消えてくれなかった。

## 2

侑依が冬季と出会ったのは、今から一年半くらい前だったと思う。そのきっかけは、侑依が坂峰製作所に就職したことだった。

大学在籍中に事務に必要な資格や秘書検定などを取っていたのは、なんとなく就職に有利になるだろうと思つてのことだった。

それもあつてか、四年の春には、すでに大手企業から内定をもらっていた。けれど同じ頃、偶然工学部の友達に見せてもらったある機械の精密さに一瞬で心を奪われてしまった。

寝ても覚めてもそれが頭を離れず、侑依は思い切つてその機械を作った町工場まちこうばを訪ねた。

そこが、坂峰製作所だったのだ。

坂峰製作所は小さな町工場まちこうばながら大手企業を相手に手堅い仕事をしており、確かな信用と実績を築いている会社だった。また、この製作所の技術でしか作れない部品をいくつも持つっていて、国内外の幅広い企業と取引があつた。

少数精鋭の社員たちは誰もがプライドを持って仕事をしており、手作業で寸違ちがわぬ精密機械の部品を作り上げている。その高い技術に感動した。

ただ一度の見学で、侑依はすっかり坂峰製作所に惚れこんでしまった。この会社は、どこの大企業にも負けない素晴らしい会社だと信じて疑わなかった。

こういう会社で働いてみたいと心から思った瞬間、侑依は内定を断る決意をした。

当然、周囲からは強く反対された。

大手企業に勤めれば、たくさんお給料がもらえて安定した生活が送れると説得された。

そして坂峰製作所からも、前途ある若者の可能性を奪うことはできないと首を横に振られた。けれど侑依はどうしても諦めきれず、何度も坂峰製作所に通い続けた。最終的に、相手が折れる形で、就職させてもらったのだ。

やっぱり周囲にはいい顔をされなかったけれど、侑依が製作所で仕事を始めてからは、徐々に何も言われなくなった。

そうして大学を卒業して四年。

二十六歳になった侑依の肩書は事務員兼社長秘書となり、経営方針について意見を求められるまじになっていった。

両親や親友、そして会社の同僚や社長にも認められ始めた頃、侑依は坂峰製作所が招待された大企業のパーティーに誘われた。

本来なら侑依は出席できないのだが、社長の大輔が侑依を連れて行くと言い出したのだ。パーティー出席なんてとんでもない、と最初は断ったけれど、社長自ら熱心に誘ってくれて、興味もあつ

たことから行くことに決めた。

そうしてパーティー当日。侑依は、坂峰製作所の社長夫婦と、その息子の優大と一緒に会場へ足を踏み入れたのだ。

初めて行ったパーティー会場は、とにかく素晴らしいの一言に尽きた。

大きなテーブルがいくつも並べられ、白いクロスの上にはシャンパングラスやワイングラスが置かれている。

それぞれの席には、綺麗にカトラリーがセッティングされていて、乾杯の前にシャンパンを注いでもらった。

「凄いね、優大」

「ああ。今回は特に盛況だ。料理も凄いし、招待客も去年より多い気がする」  
優大の言葉に頷きつつ、侑依は周囲に視線を向ける。

「こんな大きなパーティーに招待される坂峰製作所って、やっぱり凄いね」  
改めて自分の勤める会社の凄さを実感した。

あの時の侑依の選択は間違っていないかったと心から思う。

パーティーを主催している有名電気機器メーカーへ、坂峰製作所は部品提供をしていた。たった一つの部品だが、メーカーにとって必要不可欠な部品である。坂峰製作所が特許を取得している、他に真似のできない高い技術によって作られた部品だ。

もちろん、坂峰製作所にとつても、このメーカーとの取引は大きい。小さな町工場にとつて、大企業との取引はそれだけで大きな信用に繋がるからだ。

「ああ、凄いよな。きっとここで俺らの会社の名前を言つたつて誰も知らんだろうけど、誇りに思うよ。もし万が一契約を切られることになつたつて、実績は残る」

自信を感じさせる優大の言葉に、侑依も背筋が伸びる思いだつた。

「おい優大、契約を切られることになつても、とか冗談でも言うなよ。そうされないだけの技術を、ウチは持っているんだからな」

隣から口を挟んでくる大輔に、優大は肩を竦めた。

「侑依ちゃんにも、知つて欲しかつたんだよ。四年前、熱心に就職させてくださいと言つて、何度もウチに足を運んでくれたね。最初こそ、若い女の子だしきつと長続きはしないだろうと思つていた。けど、なかなかどうして根性があつて、今ではウチになくはない存在になつた。そんな侑依ちゃんに、ウチはこんな大きな会社のパーティーに招待される会社なんだぞつて、教えてあげたかつたんだ」

そう言つて大輔は、広い会場を見渡した。

その顔には、優大と同じ自信と誇りが浮かんでいる。

大輔の隣でその妻が言いすぎよ、と言つてにこやかに笑う。けれど、きつと彼女も自分の会社が凄いということを感じて疑つていない。

「はい。本当に凄いです。私は坂峰製作所の一員にさせていただけて、本当に嬉しいです」

侑依はこの場所にいるだけでお腹がいっぱいになる気がした。会場の華やかな空気に当てられて、ついワインを飲みすぎてしまふそうになる。

いけないいけない、と自重を心がけた。

「はあ……」

アルコールのせいで、少し熱くなった息を吐き出すと、隣のテーブルから女性の話し声が聞こえてくる。どうやら彼女たちは、パーティー会場で素敵な男性を見つけたらしい。

「彼、素敵ね……何関係で招待されているのかしら。私たちと同じように端っここの席だから、業務提携している中小企業？」

「違うわよ。彼、法律関係の人らしいわ。さつきからずっと気になつて、ちよつと情報収集しちゃつた。なんか希望して席を端にもらったみたいだけど、彼とその隣にいる女性、このパーティーを主催する会社の法務関係一切を引き受けているらしいわよ」

ヒソヒソ話には大きな声だから、つい聞き耳を立ててしまふ。

「えつ、じゃあ、彼つて弁護士!?」

「ええ、きつと。着ているスーツも良さそうだから、収入も凄いでしょうね。だつて、あんなに若いのに大企業の弁護士よ？」

「ねえ、後で話しかけに行かない？」

「そうね。もしかするともしかして、みたいなこともあるかもだし？」

そうして、うふふ、と笑い合う女子二人。そんな彼女たちを見ながら、侑依は美味しい料理を味わいつつ、ワイングラスに口を付けた。

そのまま何気なく彼女らの視線の先に目を向けた侑依の動きが、ぴたりと止まる。

「……っ」

思わず二度見してしまった。そして、何度も瞬きを繰り返す。

きつと今、侑依はかなりバカっぽい仕草をしていると思う。せめてワイングラスを口から離して、と思うが、そんなことにすら頭が回らなかった。

侑依がいるテーブルは、先ほど盛り上がっていた女性たちの隣だ。そして、彼がいるのは、女性たちの反対隣のテーブル。つまり、侑依にとってはテーブルを一つ挟んだ向こう側。

そこには、女性たちが騒ぐのも納得の素敵な男性が、年上の女性と談笑していた。

侑依は目聡く、その女性の左手薬指に指輪があるのを見つける。そして、素敵な彼の指には指輪がないことも確認してしまった。

ワインに酔ったのだろうか。なんだか、ドキドキして胸が苦しい。

少し落ち着こうと一度目を閉じて、再び開けた瞬間——彼とぼっちり目が合った。

「んふっ……」

咄嗟にワイングラスに口を付けたまま会釈をして、慌てて視線を外す。

侑依は動揺のあまり、自重しなければと思っていたワインをゴクゴクと飲んでしまった。

「おい！ 一気にそんなに飲んで大丈夫か？」

隣で優大が小さく注意してくるが、構わず飲み干してしまう。

「あ……凄く喉が渇いちゃって……お水も飲むから、大丈夫」

はあ、と息を吐くと一気に酔いが回った気がした。ヤバいな、と顔を手でパタパタ扇きながら、水を一口飲む。

そうして一息ついたところで、彼と目が合ったのは気のせいかもしれないと思い始めた。

だからもう一度、ちらりと視線を向ける。すると、こちらを見ていたらしい彼が、にこりと笑った。

つられたように侑依も微笑み、ぎこちなく彼から視線を外す。

「おい、顔赤いぞ。大丈夫か？」

優大が心配そうに横から顔を覗き込んできた。こくりと頷いた侑依は、おもむろにグラスの水を飲み干す。

「ちよっと酔いを覚ましてくるね。すぐに帰ってくるから」

「気を付けろよ」

優大は心配そうな顔をしたが、そこまで酔っていないと判断したらしい。彼とはよく飲みに行くし、侑依が酒に強いことを知っているからだろう。

どうせなら化粧直しもしてこようと思ひ、クラッチバッグを手に会場の外に出る。

「ふう……やっぱり、会場内の熱気って凄いいよね……」

廊下に出た途端、少し落ち着いた感じがした。もしかしたら、知らずに人々の熱気や高揚した雰囲気当てられていたのかもしれない。クールダウン目的で外をぶらぶらしてから戻ろうと思った。会場の外は人もまばらで、侑依は目についた化粧室へ入る。

用を済ませた後、鏡を見て口紅を塗り直した。

「目元はまだキレイだな」

メイクがヨレていないのを確認しつつ、髪の毛に触れる。

初パーティーということもあり、気合を入れて美容室でセットしてもらった。まつすぐな黒髪に軽くウェーブをつけ、緩くまとめ上げた髪形は、自分でも凄く可愛いと思う。

奮発して買った、セットアップのパンツスタイルの色はグレイッシュピンク。黒いドレスが多い中、明るい色味が華やかに見えて、ちょっと目を引くかもしれない。

だからきつと、あの素敵な彼と目が合ったのだろう。

「それにしたって……ため息が出るくらいイケメンだった……あれで弁護士かあ」

モテてモテてしょうがないだろうな、と勝手な推測をつぶやく。

大体、侑依を見てにこりと笑ったあの顔は、明らかにルール違反もいいところだ。

「あんなイケメンに突然微笑まれたりしたら、びっくりしてお酒も一気に飲んじゃうよ」

脳裏に浮かんだ彼の顔を、頭を左右に振って追い出す。

侑依は無駄に入った力を抜くため、一度ぐつと肩を上げて、ふーつと息を吐きながら肩から力を抜いた。そうして、よし、と気持ちを切り替えて化粧室を出る。

会場へ向かって歩いていると、入り口の近くで先ほどのイケメンが女性二人に囲まれていた。が、お世辞にも楽しそうとはいえない様子が見取れる。

他人事ではあるが、イケ男は大変だなと思った。侑依はできるだけ遠回りをして入り口に向かう。ところが彼は、微笑んで侑依に近づいてきた。

「ああ、よかった。あなたにお話があったんです。先日ご相談いただいた契約トラブルについて、少しお話をさせていただきたいんですが……」

「えっ？」

意味がわからず首を傾げる。その間に、彼はついてきた女性二人に「すみません」と言った。「この方と大切な話があるので、失礼していいでしょうか？」

にこりと笑うと、二人の女性は頬を染めてあっさり引き下がる。

侑依はその様子を間近で見て、イケメン効果の凄さを実感した。

「では、あちらで少しお話を」

そう言って軽く背中を押されて、思わず肩に力が入る。

今日はヒールの高いパンプスを履いているにもかかわらず、彼は侑依より頭一つ分以上背が高い。

その身長差にドキドキしてしまう。

同時に、女性二人から離れたかった彼に、都合よく使われたらしいのを、ちょっとだけ不快に思った。けれど、少し離れた場所にあるソファアに並んで座り、改めて彼の顔を見た瞬間、その気持ちはどこかへ行ってしまう。

綺麗な二重目蓋をした切れ長の大きな目。それはちよつと日本人にはないような、くつきりと美しい形をしている。すつと通った鼻筋にシャープな顎のライン、薄すぎない唇の形も綺麗だった。テレビに出たら一発で話題になるだろうと思うくらい、彼には人の目を惹きつけてやまない端麗さがある。

また、着ているスーツも、近くで見ると凄く良いものっぽい。男の人のスーツはどれも同じようなものだと思っていたけれど、そうではないとはつきりわかった。

彼はチャコールの三つ揃いのスーツを着ていたが、中に着ているシャツは薄いグリーン。そこに濃いモスグリーンのネクタイを合わせている。

同じように見えがちなスーツなのに、シャツでさりげなく差をつけるなんてオシャレだ。

「助かりました、ありがとうございます」

そう言つて、イケメンが微笑みながら軽く頭を下げてくる。

遠くから見ても素敵だと思つていたのに、近くで微笑まれるとその威力が倍になったように感じて困ってしまう。

しかも彼の声は、耳に心地いい低音で、とても侑依好みだった。

あまりのカッコよさに直視ができず、侑依は微妙に視線を外して頷く。

「いえ、はい……じゃあ、あの……私は、これで……」

ここにいるとますます困りそうな気がして、早くこの場から離れたくなった。なのに、立ち上るろうとしたら手首を掴まれて、心臓が跳ね上がる。

「もう少しいいでしょうか？ また彼女たちに捕まると面倒なので」

結構はつきり言うなあ、と侑依は瞬きをして彼を見た。

「それに、君と話がしたいと思つたんですが」

「は……？」

「君と話がしたいと思つたんです」

同じことを二度言われた。

なんと言うか、彼の言い方はストレートではつきりしている。それに、どこか不器用な感じ。もしかしたら、同じことを二度言つたのも、侑依に聞こえなかったと思つたからかもしれない。

「言っていること、聞こえませんでした？」

しばらく返事をしなかったら、首を傾げながらそう言われた。

この距離で聞こえないわけがないだろうと思いつつ、やっぱり彼は不器用なのかな、と感じる。

「聞こえましたよ」



再びソファに座って口を開くと、彼の表情が和らいだ。

「君の声を聞きたかった」

「は……？」

何を言っているんだ、と軽く眉を寄せる。すると、彼も同じように眉を寄せた。

「何かおかしなことを言ったかな？」

「いえ……ただ、どうして、私なんかの声を？」

戸惑いの表情を浮かべる侑依に、彼は少し考える仕草をした後、微かに笑みを浮かべる。

「目が合ったから？」

疑問形で言われて、こっちの方が首を傾げなくなった。

イケメンだけど、不思議な人だと思いつつながら彼を見つめる。そんな侑依を、彼も見つめ返してきた。しばらく無言で視線を合わせ、互いに何度も瞬きを<sup>まばた</sup>にする。

実際の時間より、長く見つめ合っていたような気がした。不思議なことに、相手への好意を覚える前に、ずっとこうしていたという気持ちに囚<sup>とら</sup>われる。

なんで、どうして、と冷静な部分で考えるけれど、それとは別の感覚的なものに支配されていて、思考が上<sup>う</sup>手<sup>ま</sup>くまとまらない。

「それに、可愛い人だと思って。君が席を立ったから、僕も立つたんだ」

「……さっきのお二人は？」

侑依は、ぼんやりしたまま尋ねる。

「隣のテーブルだったのは知っているけど、会場を出た途端声をかけられて。実は、かなり困っていたんです」

「きつと、あなたとお話ししたかったんですね」

「そうですね」

あっさり肯定した彼は、悪びれることなくこりと笑う。

ここまでのはつきりしていると、なんだか気持ちよく感じるから不思議だ。それに、彼の容姿は「そんなことないです」と、はにかんで否定するようなレベルじゃない。

「イケメンですもんね、わかります」

頷いて、侑依は彼を見上げる。

「ありがとうございます。君も可愛いですよ。思わずついて行きたくなくなるくらいには」  
何度も可愛いと言われて、なんと答えていいかわからない。

だって、どう考えても自分の容姿より彼の容姿の方が優れている。

確かに、これまでも人に可愛いよと言ってもらったことはあるけれど、社交辞令の範囲だ。

それに、この年にもなれば、女の子同士の可愛いと、男から見た可愛いが違うということくらい理解していた。

「あなたみたいな人から褒められるほどの容姿じゃないと思うんですけど……」

侑依の容姿は普通だ。それに、コンプレックスも結構ある。日本人らしい低い鼻だとか、ぼんやりして見える二重目蓋だとか。

「じゃあ、君が僕の好みなんだろう。一目惚れってありえないと思っていたけど、実際あるんだなって……今、身をもって体験している最中」

優しい眼差しに、心臓が跳ね上がる。

こんな素敵な人が、侑依に好意を持つなんてありえない。もしかして担がれているのでは、と、侑依は騒ぐ鼓動を必死に抑える。そして、なんとか平静を装って微笑み返した。

「カッコイイ人が、そんなことを軽々しく言ったりしたらダメですよ。……本気にしたら、酷い目に遭いそう」

「本気にしてくれないと困る。今頃上司は、女性の後を追いかけていった僕に呆れているだろう。これでフラれたりしたら、きつとヘタレ扱い確定だ」

彼の言葉に心が揺さぶられる。侑依の心臓はずっと高鳴りっぱなし。

彼の言う一目惚れじゃないけれど……こんな風に出会ってすぐに惹かれることなんてないと思っていた。けれど、そんな出会いが本当にあるのだと驚いてしまう。

確かに、パーティー会場で彼を一目見た瞬間、視線が釘付けになった。それに目が合った時は、心が騒いで思わずワインを一気飲みしたほど。

「それって、私をからかっているわけじゃないですよね？」

侑依は、息苦しさを感じながら彼に問いかける。

「それでも信頼が売りの職業でね。仕事で嘘をつくことはあるけど、今は本当のことしか言っていないよ」

やっぱり彼は、はっきりした物言いをする。信頼が売りと言いながら、仕事で嘘をつく正直に言ってしまうし。

「君はこのパーティーを主催している会社の招待客？」

「一応、そうです。今日は、社長に連れて来ていただいて侑依はバッグを開けて、中から名刺ケースを取り出した。

「坂峰製作所で事務員しております、米田侑依です」

軽く頭を下げながら名刺を差し出す。彼は侑依の名刺を両手で受け取った後、スーツの内ポケットから名刺ケースを取り出し、侑依に名刺を差し出した。

「比嘉法律事務所で弁護士をしております、西塔冬季です。このパーティーを主催する会社の顧問弁護士を務めています」

名刺を両手で受け取った侑依は、何度も瞬きをして彼と名刺を見比べた。そういえば、隣のテーブルの女性たちが、彼はこのパーティーを主催する会社の法務関係一切を引き受けているらしい、と言っていたのを思い出す。

あれは本当のことだったのか……！ と侑依は、驚きに目を丸くした。

「と言っても、上司とともに顧問をしているんだけどね。他にこのこと同じ規模の企業をもう一件受け持っているけど、それ以外は主に中小企業と仕事をさせてもらっている。僕の肩書は、信用するに値しますか？　米田侑依さん」

そうして彼は、にこりと笑みを浮かべて侑依の顔を見つめてくる。

「それは、もちろんです、けど……」

このパーティーに招待されていて、彼が弁護士と知っている人もいる。そして今受け取った彼の名刺。その全てを合わせると、彼は外見以上に凄い人なのだとわかる。

けれど、本当に侑依に嘘をついていないと言えるのだろうか。

急速に彼に惹かれていた自覚があるから、余計に疑心暗鬼になってしまう。

単なる出会いの一つと、軽い気持ちでいればいいのに、侑依はいつもそれができない。

「そういえば、坂峰社長に挨拶をしていなかった。一緒に行こう」

「え？　西塔さん、ウチの社長を知ってるんですか？」

「もちろん。君の会社の権利を守ったのは僕だから」

権利を守った、という彼の言葉に、侑依は首を傾げる。

彼はその間に侑依の手を引き、ソファアから立ち上がった。そのまま手を繋がれそうになって、急いで彼と手を離す。冬季はそんな侑依に苦笑しつつ、代わりに背中に手を回してきた。

大きな手だと思った。背中に彼の体温を感じる。

胸は勝手にドキドキと高鳴るし、どうにも耐えられそうにない。

「あの、手、を離してください。背中、汗をかいています」

スツと彼から距離を取ると、彼はあっさり手を離れた。

「慣れてない？」

その言葉にちよつとだけムツときて侑依は言い返す。

「そんなことはないです。でも、私たち、初対面ですし……」

右手で肩を抱く侑依に、冬季は静かに首を振った。

「こちらの言い方が悪かった、申し訳ない。でも君、凄く良いよ。好きだな、そういうところ」  
優しく微笑まれて、侑依の心臓は苦しいくらいにドキドキしっぱなしだ。

なのに彼は、すぐに涼しい顔になって会場へ入っていく。

その後を追うと、彼は迷いなく坂峰製作所の社長、大輔のもとへ歩いて行った。

「坂峰社長、お久しぶりです。ご挨拶が遅れて申し訳ありません」

冬季は侑依と話す時と同じトーンで大輔に声をかけた。

大輔は満面の笑みを浮かべて立ち上がり、冬季の手を握る。

「これは西塔さん。こちらこそ、ご挨拶が遅れてしまってます。その節は、本当に助かりました」

先ほどの、権利を守ったという言葉と侑依の記憶がようやくよく符合した。

「そういえば、ここに納めているウチの部品の契約って……」

このパーティーを主催する会社は、坂峰製作所の技術を高く評価して部品を扱ってくれていた。けれど、その契約の内容で、きちんと扱われていない部分があったようなのである。

こちらが何度も契約の確認を申し込んででも解決しなかったその問題を、新たに担当になった顧問弁護士が正してくれたのは記憶に新しい。

「顧問になってまだ一年半ですが、ああした問題を見過ごしては、企業の信頼も損なわれてしまいますからね。それに、坂峰製作所の高い技術は、正當に評価されるべきですから」

彼のその言葉に、大輔が満面の笑みを浮かべて頭を下げた。

二人のやりとりを聞きながら、彼は侑依の大切な会社を守ってくれた人なんだと、認識を改める。そして、彼が信用するに足る相手なのだとわかった。

このドキドキも何もかも、信じて大丈夫なのだ、侑依は大輔と話す冬季を見つめる。

その時、彼と目が合った。

今まで以上に、心臓が跳ね上がる。

「そういえば、どうしてウチの米田と一緒に……？」

大輔が侑依と冬季を交互に見て首を傾げた。

「ええ。実は先ほど、少し話をさせていた দিয়ে。可愛い事務員さんですね」

「そうでしょう。それでいて、優秀なんですよ。契約のことも、彼女が最初に気付いてくれましたね」

大輔が侑依を褒めてくれるのは嬉しい。でも、彼の前だと思うとなんだか凄く恥ずかしかった。

「よかったらですが、これからウチの法務を西塔さんにお願ひできませんか。……法律のことなど何も知らない町工場ですから、ぜひ西塔さんのような方に力を貸していただきたい」

冬季は侑依をちらりと見た後、大輔の言葉に頷いた。

「そう言っていた দিয়ে、こちらこそ光栄です。小さな事務所ではありますが、上司と相談し、前向きに検討させていただきます、坂峰社長」

冬季が坂峰製作所の担当になる。それを聞いた侑依は、今後も彼と会えるかもしれないという期待に胸を膨らませた。

よろしくお願ひします、と握手を交わす冬季と大輔。そんな彼を、侑依はじっと見つめた。

そして彼も侑依を見つめる。一瞬、互いの視線が交わったと思つたら、彼はすつと会釈をして自分のテーブルへ戻っていった。

いやーよかった、と言う大輔の言葉をぼんやり聞きながら、視線は彼を追ってしまふ。すると、

横にいる優大の視線に気付いた。

「何、優大？」

「なあ、あの弁護士先生と見つめ合ってたけど……、もしかして口説かれたのか？」

「……別に」

咄嗟に否定したけれど、優大は腕を組み目を細めて侑依を見てくる。

「やたらとイイ男だし、弁護士。慎重にいけよ？ お前の目、マジでハートだったからさ」  
「そ、そんなことないよ！」

目がハートと言われて焦る。

そんなことないと言いながらも、じわじわと顔が熱くなってきた、侑依は近くにあったシャンパンを一気に飲んだ。心臓の高鳴りと相まって、急に酩酊感めいてが強くなる。

ふと、彼のテーブルに目をやると、侑依を見ていたらしい冬季に苦笑された。

彼の唇が、のみすぎ、と動く。

その瞬間、早くこのパーティーが終わらないかと思った。

もう侑依の頭の中は彼のことですべていっぱいになっていて、込み上げる気持ちを止められなくなっている。こんなことは初めてで、自分はいったいどうしてしまったのかと思った。

今まで抱だいたことのない感情に戸惑いつつ、ソワソワと落ち着かない時間を過ごす。

パーティーが終わるまでの時間をやけに長く感じた。そして、終わった後、侑依は真っ先に冬季のもとへと走った。

彼とこのままで終わりたいかと思っただけ。

「あの、西塔さん……」

少しの恥じらいを感じながら、思い切つてクラッチバッグからスマホを取り出した。

しかし、自分から連絡先を聞くのはどうなのだろうと思つてしまい、その先の言葉が出なくなっ

てしまう。

スマホを持ったまま固まる侑依に、冬季がふつと微笑んだ。

「そういえば、連絡先を聞いてなかった。今度、一緒に食事でもどうですか？ 侑依さん」

「……はい！」

互いに微笑み合い、連絡先を交換し合った。

そうして初めてのご飯デートをした後は、自然にまた次のデートの約束をした。

自分でもびっくりするくらい急速に惹かれていった。こんなにも自分の心が、まっしぐらに恋へ落ちていくなんて思いもしなかった。

この人とずっと一緒にいたい、この人しかいないと考えるようになるのはすぐのことだった。

デートが嬉しくて、一緒の食事も楽しい。会うほどに彼のこと大好きになる。時にはちよつとした喧嘩もしたけれど、それも含めて彼との関係を深めていった。

出会つて半年後にはプロポーズ、そして入籍と、結構なスピードだったと思う。

それでも侑依は本当に冬季を愛していたから、とにかく幸せで何も不安はなかった。

だからまさか、結婚して半年で離婚するなんて、この時は思つてもみなかったのだ。

——冬季と夜を過ごした一週間後。

侑依はいろいろなことを反省し、きちんと気持ちを切り替えなければと決意する。でも、それがなかなか難しかった。

だから週末、侑依は気分転換も兼ねて、仲のいい友達をランチに誘った。

美味しい食事と楽しい会話で気持ちは浮上したものの、全てを知る友人について愚痴を零してしまふ。

「またやってしまった……」

久しぶりに会った大学時代からの親友の山下明菜は、食後のコーヒーを飲みながら大きなため息をついた。

「それって、西塔さんのこと？」

こくりと頷く侑依にさらにため息をついて、明菜はコーヒーカップを置いた。

「そう。急にランチに誘ってくるから、何かあるだろうな、と思っただけど……それを言いたかったのね。また会ったの？」

「うん」

「それで、エッチなことまでしたわけ？」

「……だらしのないよね、私」

侑依はテーブルに肘をつき両手を合わせる。そこに額を押し当てると、頭をパンツと叩かれた。

「まあ、否定はしないわね」

明菜にはつきり言われて、侑依は苦い笑みを浮かべる。

「離婚して親からは見放され、向こうの親にも嫌われて、安アパートで一人暮らし。そこまでしておいて、元旦那とはまったく切れていないなんてね」

言いながら、私はバカだ、と何度も心の中で自分を責める。

あの時の侑依には、離婚する以外の選択肢がなかった。自分なりに精一杯考えて出した結論だったけれど、彼に求められるまま関係が続けてしまっている現状に、どうしようもない焦燥が募る。

「私が悪いのはわかってる」

「当たり前。付き合っているのを別れたんじゃないやなくて、離婚だからね」

明菜の言う通りだ。

彼女は侑依が冬季と別れた理由を知っている。それに侑依が一方的に別れを切り出し、離婚してもらったことも知っている。

自分のわがままで、冬季を始めた皆さんの人たちを傷付けたのだから、侑依はもつときちんとし

なくてはいけない。どんなに冬季が望んでくれたとしても、彼を大切に思う人たちにとっては、侑依のしたことは決して許せることではないのだから。

現に離婚後、冬季の母親から直接電話がかかってきた。

『出会って半年で結婚。しかも、お式も挙げないなんてどうかと思っちゃいましたよ。それが半年で離婚だなんて……。もうこれ以上、うちの息子に迷惑をかけないでちょうだい。今後は、何があっても絶対に会わないでくださいね』

もともと、彼の両親からはあまり良く思われていなかった侑依である。義母の怒りはもつともだと思つた。だから侑依は、電話口で、「はい」と返事をした。

彼とは、絶対に会わないつもりだった。けれど、まったく会わないというのは状況的に難しく、侑依にはどうしようもなかったのだ。

なぜなら彼は、侑依の職場に一月に一回、顧問弁護士として訪ねてくる。どれだけ冬季との接触を避けようとしても、仕事である以上まったく会わないということはできなかった。

「明菜の言う通り、離婚したんだからエッチはダメだよね」

わかっているのに……。嫌いで別れたんじゃないかと、むしろ好きすぎて別れたから、求められると断り切れないのだ。

自分の中にある矛盾した気持ちを持って余し、侑依は項垂れる。

ため息をついた明菜は、おもむろにデザートのカークにフォークを刺して、一口食べた。

「大好きな人と結婚するのに、その人と離婚するって相当だと思うけど。早まったんじゃないの？」  
「ううん……。冬季さんの隣にいるには、もつと強くないとダメだった。私は弱くて、彼を誘惑してくるキレイな人や可愛い人たちから上手く目を逸らすことができなかった。悪いことばかり考えてしまうし、嫉妬で胸が苦しくなる。彼が靡いたりしないってわかっていても、笑って堂々としていられるほど、強くなかった」

彼と結婚していた期間は半年間。本当に幸せで夢のような日々だった。と同時に、冬季のことを知れば知るほど、彼の隣にいることに自信が持てなくなっていた。

結婚している間、彼と一緒に出席した食事会や記念パーティーは、ささやかなものから豪華なものまでいろいろだった。どの集まりでも、彼は綺麗な女性に話しかけられ、アプローチされていた。侑依が隣にしようと彼が指輪をしようとして、関係なく。

そうした女性たちは大抵、侑依の方を見て自信ありげに、または、どこか意地悪そうに笑うのだ。まるで自分の方が冬季に似合っていると、見せつけるみたいに……

彼と参加した最初のパーティーの際、侑依は思わず、『キレイな人にモテモテだった』と少し不満を口にしてしまった。その時、冬季は侑依の手を取って言ったのだ。

『妻のいる僕に、ベタベタして欲しくないと言っておいた』

そのストレートすぎる言葉に目を丸くする侑依を見て、彼はフツと笑った。

『結婚して妻を同伴して来ている僕に、こうやって近づくのはあまりいいこととは思えませんので、

離れてください、と言っておいた。つまり、はしたない女はお断りだと伝えたら、近づいてこなくなった』

そんな彼を頼もしく、愛おしく思ったものだけれど、結局は一緒だった。

彼の周囲には、常に女性が集まってきた。彼が浮気などしないと信じていても、はたして本当にそうなのだろうか、と疑心暗鬼に囚われてしまう。

冬季を信じているのに、もやもやとした変な渦が心の中から消えてくれない。

彼が仕事で遅くなるのはいつものことだけれど、ベッドに入ってくるまで安心して眠れなくなってしまう。

大好きな人をこんなにも疑ってしまう自分は、彼に相応しくないのでないか……

そんな思いが侑依の中に芽生え始めたのは、いつの頃からだろう。

このままでは、嫉妬や不安からいらぬことを言っただけで、冬季を傷付けてしまうかもしれない。侑依は子供みだいな独占欲で、彼を縛ってしまいそうな自分が怖くなった。

優しくて、正直で、抜群の容姿をしながら少し不器用なところのある素敵な人。仕事に誠実で、世間からきちんと信頼と評価を得ている、侑依の夫。

彼は微塵も揺らいでいないのに、侑依の心だけがどんどん揺らいでいってしまう。

いつか冬季は、そんな侑依に呆れ、愛想を尽かしてしまうのではないか。

彼の心が侑依から離れていってしまうのではないか。

気付くと侑依は、そうした恐怖と不安に押し潰されそうになっていた。

そこから逃れるために、バカなことをした。

今の状況は全て侑依の弱さが招いたこと――

「西塔さんみたいなイイ男が離婚したってわかったら、誰も放っておかないよ？」

目の前の明菜が、じっと侑依を見に来る。

「そうだね。冬季さん、左手の薬指にまだ指輪してるけど、私と離婚したって周囲はもう知ってるみたい」

『指輪を外さないのは、奥さんにまだ未練があるから。一途な西塔さんが可哀そう、私が支えて奥さんを忘れさせてあげたい、って、ここぞとばかりにアプローチしてきてるわよ。もし、本当に終わりにしたいなら、彼とはもう会わない方がいいかもしれないわ。西塔さんのファンには、プライドの高いお嬢様が多いし、何を言われるかわからないわよ』

以前、冬季の同僚である比嘉法律事務所のラリーガル、大崎千鶴に言われた言葉だ。離婚後、たまたま彼女が坂峰製作所に法務関係の書類を持ってきてくれた時に、直接そう言われた。

自分で選んだ結果だが、彼女の言葉は鋭く侑依の胸を抉った。けれど、なんとか笑って対応した。

『……もう離婚したし。あの人に好きな人ができて、私には関係ないから』

もし本当にそうになったら、きっと悲しくてすぐには立ち直れないかもしれないけど。

『西塔さん、侑依さんとお付き合いを始めてから、印象が柔らかくなったの。だから、きつといい



パートナーに巡り合えたんだな、って思ってたのよ。西塔さんのどこがいけなかったの？ 会社でそういう話になった時、西塔さん、僕が悪かっただけ、って、少し表情を暗くして苦笑するの」

千鶴の言葉に、侑依は何も答えることができなかった。ただ俯いて押し黙る。

冬季は何も悪くないのに、そんなことを言わせてしまった自分に、自己嫌悪の嵐だった。

明菜は、今日何度目かのため息をつき、侑依を見る。

「まったく会わないってことはできないの？ 侑依が避けるとか？ 彼、侑依の新しい家知らないんでしょ？」

「引越先、教えてないしね。……でも、どんなに避けても、仕事で一月に一回は必ず会うことになるから。冬季さんは坂峰製作所の法務関係一切を任されてるし」

侑依の言葉に明菜は肩を竦め、デザートの最後の一口を食べた。

そのまま彼女はコーヒを飲んで、再び口を開く。

「仕事ならしやうがないけど、でもそれって一月に一回なんでしょう？ だったら、どうにでもなるんじゃない？ それに、侑依だったら転職だってできるでしょう。別に坂峰製作所にこだわらなくても……収入だって……」

「そうかもしれない。でも、私は坂峰製作所が好きなの。あの会社に惚れ込んで、無理やり入れてもらったんだから、そんな理由で辞めたりしない」

きっぱりと言うと、明菜は顔を伏せて小さく息を吐く。

彼女がそう言うのもしやうがないこと。明菜は、就職する時も凄く反対していたから。

一流企業の内定を蹴った時、両親、そして明菜を始めとする友人や知人、大学の教授さえ侑依に思い留まるよう説得してきた。でも、頑として自分の意見を曲げなかったから今がある。

「一度決めたことは、きちんとやり遂げたい。それに、今の仕事に誇りを持つてるの。ただでさえ私は、結婚をダメにして冬季さんと添い遂げることができなかったんだよ。これ以上、周りの人たちを裏切りたくない」

冬季と結婚した時、この人の傍に一生いるんだと思った。いつか彼の子供を産み育て、子供が自立したら、二人でゆっくり旅行に行く未来を想像していた。

それを自分でダメにして、周囲の人たちの気持ちも裏切ってしまった侑依は、今はとにかくできることをしつかりやるしかない。

「侑依が西塔さんを紹介してくれた時、イケメンの割に女を見る目があるなって感心してたの。そんな男を捕まえた侑依も、さすがって思った。でも、彼のせいで侑依が苦しんでいるのは、正直、見ていられなかった」

でも、と明菜はため息をつき、じっと侑依を見つめた。

「侑依がどれだけ西塔さんのことを好きか知ってる。どんなに言い訳したって、今も変わらず好きなんでしょ？ だから、求められたら断れないんじゃないの？」

凶星を指された侑依は、キュッと唇を噛んだ。

「……違うよ」

そう言つて侑依は明菜から目を逸らす。彼女は呆れた顔をして、コーヒーを飲み干した。音を立ててカップを置いた明菜は、身を乗り出して侑依を指さす。

「好きだから、引きずられるんでしょ？ 元夫婦とはいえ、お互いフリーの大人だし、極論を言えよ、そういうのもアリだとは思ふ。でも、侑依は真面目だから、はじめをつけたいんだよね？ だったら、対応を考えなきゃ」

まったくもつて、明菜の言う通りだった。

侑依は離婚したからには、はじめをつけたいと思いつつ、未だにつけられずにいる。

離婚した直後、侑依は冬季と連絡を絶っていた。

それもあつてなのか、坂峰製作所に一ヶ月に一度は訪れていた彼が、離婚をした月は電話連絡だけで姿を現さなかった。

スケジュール的に、どうしても行くことができないと連絡があつたけれど、侑依のせいだと感じた。

別れたのだから、会えなくなるのは当たり前だろう。けれど、そうなると心のどこかで彼に会いたい気持ちが強くなっていく。侑依はその気持ちを、抑え付けるのに必死だった。

そんな侑依の心をわかつていたとでも言うように、離婚からちょうど一ヶ月経った頃、冬季が坂峰製作所に現れた。侑依の帰宅時間を見計らつて来たとしか思えないタイミングだった。

侑依は溢れ出す気持ちを強く抑え込み、無言で彼の横を通り過ぎようとした。けれど、すれ違ひざま腕を掴まれる。

『家に君の忘れ物がある。今から取りに来ないか？』

掴まれた腕から伝わる彼の温もりに、これまで必死に抑え付けていた心の籠が外れてしまったのがわかった。

忘れ物を取りに行くだけと言ひ訳して、彼の車に乗った。そして、懐かしい部屋で忘れ物を受け取つた侑依は、彼に抱きしめられ背中を撫でられた。

『君の背中が見たい。君が欲しい』

冬季は明確に侑依を欲し、押し付けられた下半身はすでに熱くなっていた。

はつきりと欲望を湛えた目を向けられ、苦しうに侑依、と呼ぶ彼の低く掠れた声に、簡単に落ちてしまった。

拒絶することなどできなかった。

離婚して一ヶ月、彼の電話もメールも無視続けた。自分の気持ちから目を逸らし、ずっと抑え込んできた心は、彼に名を呼ばれただけで簡単に開いてしまった。

冬季との一ヶ月ぶりのセックスは、我を忘れるほど気持ちがよくて、侑依はすぐにグズグズになり、これ以上ないくらい感じてしまった。

「ねえ、なんで顔、赤くしてるの？」

明菜の声にハツとする。  
「えっ？」

熱く濃厚だった夜を思い出し、知らず顔を赤くしていたらしい。でも、それはしょうがないことだ。あの日のことは、今も侑依の脳裏に深く焼き付いているから。

「そんなんで、大丈夫なの？」

さらに呆れた顔をする明菜に、侑依は椅子に座り直して頷く。

「大丈夫」

その言葉に、どこか心配そうな顔をする親友を見つめた。

好きな人との行為に心は満たされたけれど、あの日以来、強い後悔と背徳感が侑依の心を苛み続  
けている。

「仕事で会うのは仕方ないとしても、プライベートでは極力話さないようにする。どんなに求められても、もうエッチはしない」

自分に言い聞かせるように言葉にすると、明菜は首を傾げる。

「……本当にいいの？ それで」

「うん……自分で選んだ結果だし」

「侑依……」

表情を曇らせる明菜に微笑んで、侑依ははっきりと言った。

「私たち、もう離婚したんだから」

再び自分に言い聞かせながらも、頭に浮かぶのは冬季のこと。

早く頭の中から追い出したいのに、彼は一向に出て行ってくれなかった。

けれど、どんなに後悔しても、現実は変わらない。

全部、大切な手を放してしまった自分のせいなのだから。

\* \* \*

明菜とランチを楽しんだ五日後、冬季が仕事で坂峰製作所に来てきた。

「坂峰社長、こちらが台湾の工場との契約内容です。そして、こちらが中長期的な財務の見直し案になります。といっても、坂峰製作所は黒字経営を続けていますので、このまま堅実路線を進めるの  
のがいいと思います」

「ああ、ありがとうね、西塔さん……まあ、黒字といってもギリギリだからね。銀行からの融資の  
件もあるし……今のご時世、なかなか厳しいよ」

はは、と小さく笑いながら社長の大輔が書類を確認していく。眼鏡をかけて、じっくり読むのが  
大輔らしい。

その様子を見ていた侑依は、冬季と目が合った。にこりと笑う彼に、事務的な笑みを浮かべてパ